琉球大学学術リポジトリ

ゲーリー・スナイダーと大学

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-01-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山里, 勝己, Yamazato, Katsunori
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15287

Ryudai Review of Language & Literature No. 34, 1989

ゲーリー・スナイダーと大学

山　里　勝　己

1930年生まれのアメリカの詩人ゲーリー・スナイダーは、教室で次のように自己紹介をする。

「僕は北シエラ・ネバダ山脈の西側の斜面、ユバ川の南支流の北、米松とポンデローサマツが混じり合う森の中にすんでいる。」

あるいは、最近の自分については次のような説明をするときもある。

「僕は、サクラメント川の支流のひとつ、つまりユバ川の南支流、を100マイルほど上流に上ったところに住んでいる。日本から帰ってからずっとユバ川の近くにある僕の家を拠点に作戦行動を展開してきた。ヒット・アンド・ラン的講演やワーク・ショップや朗読会などをやってきたが、もう走り回るのをやめてすこし落ち着くことにした。」

どういうことかと言うと、1986年にカリフォルニア大学（デイヴィス校）からスタッフに加わらないかという誘いがあったとき、その申し出を受け入れたのである。1年間ずっと大学で教えるということではなく、春の学期（スプリング・クォーター）だけ、つまり10週間だけプロフェッサーになることを承諾したのだ。

現代アメリカを代表する詩人の1人、1975年度ピュリツァー賞受賞者となると待遇はいきおい最高水準のものとなる。(最近アメリカ芸術院会員にも選ばれた)。春の学期だけだから、給与は年額の$\frac{1}{3}$である。しかし大学は1年中使用できる研究室を用意し、週に2回だけ講義をしに森の家から出かけてくる詩人のために学生寮の部屋をひとつ特別に開けてくれた。

大学では、大学院の詩のワーク・ショップやアメリカ文学のセミナー、それに学部学生を対象にした「自然の文学」などを担当している。「自然の文学」と言っても、自然とはこの場合はアメリカ独特のウィルダネス（Wilderness）の

こと、建国以前からアメリカ人の精神に大きな影響を与えてきたあの野性に満ちた大自然のことを指している。「ウィルダネスの文学」(Literature of Wilderness)はまだ研究も進んでなく、最近になってやっと2、3の大学の英文科で取り上げ始めた領域であり、スナイダーはこの面では詩人としても思想家としてもパイオニアであると考えられている。この科目では、H．D．ソローや近年の環境保護運動の高まりの中で再評価されつつあるジョン・ミュア、そしてロビンソン・ジェファーズのような古典的な詩人や作家たちが取り上げられるが、もちろんいま活躍中の作家やエッセイストや詩人たちも講義と討論の対象になり、ときにはその彼らが教室に顔を出して作品を朗読し学生たちの質問に答えるということもある。歴史を振り返れば、アメリカ人の生活は、ウィルダネスを離れては考えられないということに気づく。彼らは森に住みつき森をきり開くことで国をつくり始めたひとたちなのである。だから、一見傍流に見えるこの領域は、実はアメリカ人の精神に深くかかわる領域であり、アメリカ文学の主要作品の多くにウィルダネスの存在と影響が認められるのである。それはまたアメリカ文学をアメリカ文学たらしめている主要な要素のひとつであると言っても言い過ぎにはならないものなのであろう。

*

詩人教授なんて、教室の中ではどうせ言いたい放題したい放題なのではないか、と懐疑的になるひともいるであろうし、このことは実際に根拠のない懐疑ではない。詩人や作家はしばしば大学に対して叛乱を起こすことで文学上の出発をする場合が少なくない。げんにスナイダー自身が研究者になるつもりで入学したインディアナ大学の大学院を1学期でやめてしまっている。詩人として生きるためである。(だから英文科の他の教師たちがすべて博士号保持者であるのに対して、スナイダーただ1人だけが学士号保持者なのであるが、この場合の学士号はまさに詩人の勲章とでも呼べるものなのであろう)。詩人というものはアカデミックな訓練はあまり受けていないから、「講義」というよりは「ワーク・ショップ」のほうが向いているし、彼らが一貫した「まともな」論理で教

室で学生に教えることはできないのではないか、という不安があったとしてもこれは当然であろう。実際、スナイダーの前任者の名高いピュリツァー賞受賞者は、現代詩の講義を担当していたが、「講義」とは名ばかりで、内容は同時代人であるT．S．エリオットやエズラ・パウンドなどの大詩人たちのゴシップ、よもやまの噂話に満ちたものであった。それはそれなりに熱気があり時代がよく感じられ学ぶことの多い「セミナー」ではあったが、大学で期待されている「アカデミックな講義」には程遠いものであった。

ところが、ゲーリー・スナイダーはひと味ちがう詩人なのである。彼は大学をよく知っている詩人なのだ。インディアナを去った後、学位取得を目的とせずにカリフォルニア大学（バークレー校）大学院で日本語と中国語を数年間学んだこともある。学者になっても大成したであろうということは出版された彼の卒業論文を見ればわかる。オレゴン州にある名高い私立のリード・カレッジで書いたものだ。また、60年代の初め頃、日本滞在中に招かれて1年間カリフォルニア大学バークレー校で講師として教えたこともある。

まずはプロフェッサー・スナイダーの大学と英文科に関する考えを要約しながら引用してみる。

「(大学は文化の目録を作るという仕事のほかに)我々の伝統、我々の有する知識や世代を再評価するという機能があるんだね。またその過程で以前には目につかなかったもの ── ブレイクやメルヴィルの詩のようなもの ── が再評価されるということもある。だから英文科は、送られてきた詩誌などをほうり込んでおいて、後で読もう、いまは時間がない、というふうに使われる段ボール箱みたいなものなんだよ。回顧的な機能だね、時間的には。新しい飛躍的な進歩とか発見を求める自然科学は前を向いているね。英文科は前に歩きながら後ろを見ている。歩きながら何が起こったのか理解しようとしているようなものだ。だから彼らは伝統を確立しようとしていて、それが彼らの持っている価値だ。僕はそれを尊敬している、大いに尊敬している。ところが、彼らは自分たちの仕事に喜びと誇りを見いだすくらいに十分に自分たちの仕事を理解してるとは思えない。悲しいね。彼らの仕事は部族の仕事なんだよ。英文科のプロフェッサーたちはキーヴァ[インディアンの地下礼拝所]の僧侶みたいなものさ。我々

の質問にこたえてくれるひとたちなんだよ。若者に、彼らがやっていることが深められるような、ちょっとした知識を与えることができるひとたちなんだね。」

さて、このような英文科とプロフェッサーたちからスナイダーはなにを学んだか。

「僕はオレゴン州のリード・カレッジに行った。そこですばらしい先生たちに出会い、図書館の使い方を学び、能力の限界まで勉強させるような雰囲気の中で学んだ。先生たちがごまかしを許さないんだな。リード・カレッジで僕は僕の散文をすっきりしたものにし、いろいろな角度からものを考え議論することを学び、僕自身のラディカルな政治観を展開できる領域を見つけた。

それはまた強烈な教育だった。だから後で自分自身を脱教育(de-educate)する必要があると思ったほどだ。4年間教育を受けたら同じ期間ほど自分をde-educateすることが本物の教育だ。De-educateするということは、普通の生活、普通の人々にもう一度触れること、自分の肉体で泥に触れ、ほこりにまみれたりすることだ。書物からはなれ、自分が西洋文化の担い手だというようなエリート主義のくだらない考え方を捨ててみることだ。そして最終的には、自分の本当の精神、言語以前のおのれのオリジナル・マインドに到達することだ。」

*

ゲーリー・スナイダー教授はたまにはネクタイをして教室に出てくる。三つ揃いの背広などというものはもちろん持っていない。清潔そうな「普段着」を着て地味なネクタイを締めるだけである。教師のユニフォームとでも言おうか。普通は、黒い布製のバッグを持ち、黒いふるぼけたゴムゾーリを履き、カーキのずぼんに茶色のシャツを着て ── だいたいそんな恰好で ── 200人は収容できる教室に現われてくる。7時きっかりに顎髭をのばし髪を後ろに束ねたティーチング・アシスタントがしゃがれ声で出席を取り始める。(受講生が多いクラスには大学院生の助手がつき講義や採点などを手伝うことになっている)。その間だいたい10分、プロフェッサー・スナイダーはテキストやらノートやらを机の上に広げながら彼のアシスタントが出席を取り終えるのを待つ。それから彼は

一方の手をポケットに突っ込み、もう一方の手でアゴヒゲをしごきながら、ノートなしで理路整然と「ウィルダネスの文学」を語り始める。それはもう見事としか言いようがない。「詩人」という言葉から連想されるような論理の飛躍であるとか、突飛なメタファーであるとか、そういうものは一切ない。彼は wilderness という言葉の定義を、*OED*（『オックスフォード英語大辞典』）から引用し、その定義にあらゆる角度から検討を加えていく。通俗的な「詩人教授」のイメージはそこにはない。学者以上に学者らしいのがゲーリー・スナイダーという詩人なのだ。

彼の自宅の蔵書は見事に「アカデミック」なもので、彼の受けた大学教育の良さが反映されている。また彼の講義には de-education の成果がふんだんに盛り込まれる。森で熊に出会ったときはどうすればよいか。走りだしてはいけない、じっと立ち止まったまま熊の野郎をにらみつけろというひともいるが……風向きのこと、西部の灰色グマの性格、インディアン神話の中の熊と熊に嫁いだ女の話。そのときにはもちろんウィリアム・フォークナーの名作「熊」に言及することを忘れない。アラスカのカリブーの胃の内容物とその味。野性の木の実がたわわに実る理由。「出る杭は打たれる」という日本の格言とその文化的背景。中国の寒山の詩とその翻訳について。アイヌの熊祭り。タンカーの船室と船員たちの呑みっぷり ── そして彼らのエスプリ。京都の禅の老師の提唱のつぶやき。若い頃ヨセミテ国立公園で登山道を作ったときの苦労話。そのときに使った道具のこと。シングル・ジャック・ハンマーとはなにか。知っているものは手を上げよ。150人ほどの学生のうち誰一人として手を上げる者はいない。「ああ、やれやれ、アメリカの労働者は一体どこに行ってしまったのだろうね」とスナイダー教授がおおげさに嘆くと学生たちがどっと笑う。

*

詩や文学史を語るのもさることながら、プロフェッサー・スナイダーがほんとうに得意としていることは、若い学生たちに生き方を教えることであるようだ。彼のライフ・スタイル自体がその答えになっている。しかしながら、「いか

に生きるか」とか「自分は誰であろう」というのはすこし使い古されてしまったクエスチョンであり、スナイダー氏はエコロジカルな Where am I ? というクエスチョンをより好んで使う。冒頭に紹介した彼の自己紹介の新しさの根拠はここにある。プロフェッサー・スナイダーは、モダニズムの思想家達 —— たとえばフロイトやマルクス —— の偉大さを認めながらも、20世紀後半の問題を扱うには彼らはいささか古めかしくなり始めている、不十分になってきているのではないかと学生たちに問いかける。例えば、マルキシズムの社会批判の有効性を認めながらも、それがやはりユダヤ・キリスト教の伝統の中にあり、人間中心主義の思想であること、「ヒューマン・ショーヴィニズム」からはけっして自由ではありえないこと、などを説明していくのである。これは京都で10年ほど禅の修業をし、その後でカリフォルニアの森の中に住み、北アメリカ大陸のウイルダネス＝大自然を通してものを考えてきた人物の思想である。だからスナイダー氏の詩集には次のような作品が含まれる。

Pine Tree Tops

in the blue night
frost haze, the sky glows
with the moon
pine tree tops
bend snow-blue, fade
into sky, frost, starlight.
the creak of boots.
rabbit tracks, deer tracks,
what do we know.

これは短い簡潔な詩だが、存在の全体性、相互依存性を重く考える詩人の作品である。最後の３行(ブーツのきしみ／兎の足跡、鹿の足跡／我々は何を知っているというのであろう）は特に面白い。人間のブーツ（人間の道）と兎の道

と鹿の道が並列され、この美しい夜の青い月明かりの中で、人間の「小さな」知識と傲慢さとが鋭く問われているといえるだろう。

スナイダー教授は、学生達に「もうあちらこちら移り住むのはやめよう」と提案する。建国以来、アメリカ人たちは、国内をあちらこちらと機会を求めて移動することが彼らの国民性だと考えてきた。しかし、近年のエコロジー危機の中で、移ってばかりいることから生じるメンタリティーの危険性がわかってきた。これからは国旗に忠誠を誓うのではなく、自分の住んでいる土地に忠誠を誓え、とプロフェッサー・スナイダーは学生たちにアドヴァイスする。根無し草の疎外を生きるよりは、土地の歴史、自然、地理を学べとすすめる。デラシネは究極的には〝ダラシネー〟にも通じる、生まれた土地に住み着くことはひどくラディカルな行為になりつつあるとプロフェッサー・スナイダーは説明するのである。

*

ゲーリー・スナイダーは、アレン・ギンズバーグと並んで、1950年代の「ビート派」を代表する詩人であると考える批評家は多い。いわゆる「ビート」とは何であったか、という質問に、スナイダー氏は時には簡潔な答えを用意する。

「あの当時我々は冷戦やスターリニストのメンタリティーについていけなかった。西側の資本主義とソビエトの全体主義との中間に第三の道を見つけようとしたのだよ。それが後でビートと呼ばれるようになった。」

だが、スナイダー氏のものの考え方は、「ビート」という文学的、社会学的用語に簡単に凍結されるものではない。それは、西洋の思想的伝統、自然、エコロジー、禅、アメリカ・インディアンなど、いろいろな要素が入り混じったものである。このまとめにくそうに見える考え方を、プロフェッサー・スナイダーはわかりやすくゆっくりと学部の学生に説明していく。

彼のクラスに常時出席している学生は150人くらい。そのうち50人ほどが聴講生というか、モグリの学生というか、つまりは登録していない学生達だ。学生と言っても年齢層は幅広い。学外から夕食を済ませて「話を聞きに来た」〝非学

生″も少なくない。クラスは7時にはじまって10時に終わる。15分の休憩をはさんで約2時間はプロフェッサーの講義があり、残り1時間程度は質問の時間。これがないと学生からの評判が悪くなる。アメリカの学生は質問するのが好きだ。恥ずかしがらずに何でも率直に聞いてくるし、自説も堂々と展開する。教師と学生は、質疑応答の中で自らの説と理解を補強し、あるいは修正しつつ学んでいく。広い教室の中で多くの手が上がる。スナイダー教授は公平に指名していく。ひとさし指1本でひとを差すのではなく、必ず中指を添えて2本の指で差す。これはアラスカのエスキモーたちの流儀だという。新しい考え方に対して学生たちはいつでもどこでも熱心に質問する。プロフェッサー・スナイダーは時にはジョークを交えながら丁寧に説明を繰り返していく。学生達は明らかにプロフェッサー・スナイダーを尊敬し、この詩人教授の講義を楽しんでいる。プロフェッサー・スナイダーもまた学生たちを挑発したり長い説明をしたりすることを楽しんでいる。

*

1987年度春の学期の10週目、つまり最後の講義に、プロフェッサー・スナイダーはひどい風邪を引いたまま出てきた。声が小さくて講義もいつもの元気がない。不調だ。だが、それでも3時間を手を抜くことなく話し続けた。

ゲーリー・スナイダーは、アメリカで詩人として「食っていける」数少ない人物の中の1人である。もちろん大学で教えることで受ける給与は魅力がある。いままでのように、国中を講演や朗読会でヒット・アンド・ラン的に飛び回るかわりに、じっくりと詩を書く時間が増える。しかし、プロフェッサー・スナイダーに言わせれば、なによりも素晴らしいのは、「若いひとたちと接し、大学の雰囲気に接すること」なのだ。

「今日は微生物学者と昼食を食べ、明日は動物学者とお昼を食べ、その次は獣医学関係者やワイン学のひとたち、という具合に知的好奇心を満たすことができる。ほんとうに素晴らしい。いろんなことを研究しているたくさんのひとたちと接触するというのは実にエキサイティングだね。」考えてみれば、大学で

は、実に多彩なひとたちがいろいろと面白いことを研究しているのである。考えようによっては、あるいはやりようによっては、大学はとてつもなく楽しい場所になりうるはずなのである。詩人でプロフェッサーのゲーリー・スナイダーは、そういう大学を最大限に楽しむことができる、数少ない人間の１人であるようだ。